

口頭発表にみられる修復の日韓対照分析：日本語教育での応用を視野に入れて

著者	舩橋 瑞貴
雑誌名	国立国語研究所論集
号	12
ページ	13-27
発行年	2017-01
URL	http://doi.org/10.15084/00000851

口頭発表にみられる修復の日韓対照分析

——日本語教育での応用を視野に入れて——

船橋瑞貴

群馬大学／国立国語研究所 共同研究員 [–2014.09]

要旨

日本語と韓国語の口頭発表における修復（注釈挿入と言い直し）を取り上げ、修復を実現する際の言語的手段が異なることをみる。助詞の言い直しにおいては、選択される言語的手段が助詞と名詞の膠着度の異なりとかかわっている可能性を示す。さらに、助詞と名詞の膠着度が低い日本語に関しては、言い直しの開始位置と関係があることを示す。従来の対照研究では、言語体系内の要素を対照単位とするアプローチが多くとられるが、日本語教育のための対照研究においては、ある言語行為を行う際の言語的手段の選択というアプローチも必要であることを主張する*。

キーワード：言語的手段の選択、助詞と名詞の膠着度、注釈挿入、言い直し

1. はじめに

外国語として日本語を学ぶ学習者は、母語を既存の言語能力とする。そのため、日本語学習において、母語を参照するというプロセスの存在は容易に推測される。近年、異なる母語の学習者が同じ誤りをおかすという事実や、母語にかかわらず学習者が独自の文法体系を形成するといった報告（野田他 2001）により、言語学習には母語以外の要素もかかわっていることが示され学習者の個体差が焦点化されている。しかしその一方で、さまざまな言語使用場面において母語の影響が窺われる（鈴木・白畑 2012）ことも事実であり、母語はやはり無視できない要素である。よって当然のことながら、学習者に提示される日本語情報は、学習者の母語を考慮したものが求められる。学習者の母語を考慮する際に大きな手がかりの一つとされるのが、学習者の母語と目標言語である日本語を比較対照して共通点と相違点を明らかにする対照研究（contrastive analysis）による知見である。言語研究においては、形態素、「主語」「ヴォイス」といった文法カテゴリー、あるいは、日本語教育で扱われる文型などを単位として比較対照が多くなされてきた。そして日本語教育においては、言語研究により蓄積された知見を踏まえ、学習者の母語と日本語の相違点が、予想される習得上の困難点としてとらえられてきた。

日本語教育を視野に入れた対照研究の蓄積状況から、日本語教育における対照研究の重要性（井上 2002、熊谷 2002）は認知されており、対照研究に関する知識が教育現場において有益であることは既に共有されているといえよう。しかし本稿は、日本語教育のための対照研究としては、従来の対照研究のアプローチでは不十分であると考え。日本語を学ぶ学習者は、自分の望む日

* 本稿は国立国語研究所領域指定型共同研究プロジェクト「日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究」（プロジェクトリーダー：柳町智治）の研究成果である。

本語によるコミュニケーションを達成するために日本語を学んでいる。学習者にとって、日本語の体系を学ぶことは重要であるが、体系を学ぶのみでは不十分である。日本語が実際に使えるかという運用の観点が必要となる。実際のコミュニケーションに即していうならば、ある特定の言語形式や文法カテゴリーを使いたいという動機からコミュニケーションを行う者はいない。人は、何らかの思いを伝えたいという動機からコミュニケーションを行う。コミュニケーション能力の育成を目的とする日本語教育においては、従来の対照研究のように言語形式や文法カテゴリーなどの言語体系内の要素から出発するのではなく、ある言語行為を行いたいというコミュニケーションの動機から出発するアプローチをとらなければならない。本稿が日本語教育の立場から述べた、従来の対照研究におけるこの問題点は、既に指摘されるところでもある。

人間を取り巻く世界に生起する事象は無限に多様であるが、言語の語彙や構文パターンは有限である。無限の事象は、概念化プロセスを経て有限個の表現形式の鋳型にはめ込まれる。言語の表現形式は、世界に対する概念化の現れであり、ひいてはその言語を話す人々が共有する認知パターンの反映でもある。ところが、従来の対照言語学は、言語間に存在する類似、差異の基底にあるこうした概念化プロセスに目を向けず、自明のごとく想定された種々の文法カテゴリー（たとえば、「主語」「ヴォイス」「モダリティ」など）を取り上げ、それらを比較対照し、相互の異同や共通点を指摘するにとどまった。（生越 2002: 2）

コミュニケーションの動機から出発するアプローチにおいては、望む言語行為を達成するために、どのような言語形式をとっているか、どのような構造で、どのような音声や文字にのせて産出しているかをみる。すなわち、ある言語行為を実現するためにはどのような手立てをとるべきかという言語的手段の選択、この視点が重要となる。

2. 日本語と韓国語を対照することの意義

前節で述べた本稿のこの問題意識を論じるには、はじめの手がかりとして、日本語と言語間距離に近い韓国語とを対照するのが適当であると考えられる。類型論的に近い言語と対照することで、言語行為を実現する際の違い、つまり、言語的手段の選択における違いがより際立つからである。

日本語と韓国語は、ウラル・アルタイ語族に属すると想定される膠着型言語（agglutinating language）であり（コムリー 1992）、語彙や文法形式素の形態においても高い対応関係が指摘されている。語順や、名詞に助詞をつけ、用言に語尾をつけて文を作るといった統語構造の類似、敬語体系など、共通する点が多くみられ、韓国語は日本語にとってもっとも親族語である可能性が高く（柴谷 1984）、日本語とよく似ている言語の筆頭としてあげられる。既に多くの対照研究の蓄積があり、類型論的に共通点が多いことから、言語体系内の要素を単位とする比較対照が盛んになされてきた。

仮に、母語と用いる言語間に対応する形態が存在したとしても、実際の言語行為においては、特定の言語における形態の選択およびその用い方といった言語的手段がかかわってくる。ある事象を母語ではない言語を用いて伝えたいと思ったとき、選び取るべき言語的手段は、「(用いる)

言語内の問題」である。母語と用いる言語における、対応する言語体系内の要素の有無や異同といった「言語間の問題」とは直接かかわらない。これまでなされてきた言語体系内の要素から出発する比較対照は、後者の問題において多くを示唆することができるが、前者の問題を焦点化することはできない。本稿は、実際のコミュニケーションを見据えた日本語教育のための対照研究には、後者の、従来の対照研究の視点にくわえ、前者の、ある言語行為を行う際の言語的手段の選択における異同という視点も必要であると考えられる。

対照する言語間に対応する言語体系内の要素が存在しても、特定の言語行為において、対応する要素が同様に選択されるとは限らないという事実を示すことで、ある言語行為を行う際の言語的手段の選択という視点の必要性を明確に提示できると考える。これが、日本語と韓国語を比較対照することの意義であり、日本語と類似する言語を母語とする韓国語母語話者にこそ、本稿の主張するところの言語的手段の選択という視点が必要であるともいえよう。

3. 対照する言語行為と本稿の目的

本稿では、自らの発話に何らかのトラブルをみとめた際に、その発話を調整するために発話することを「修復」と呼ぶ。この修復の一形態である「注釈挿入（船橋 2011）」と言い直しを取り上げる。注釈挿入、言い直しは、日本語では日常の話し言葉に頻出し、統語上の適格性からは破格、話し言葉における非流暢性としてくられる言語現象であるが、行為の目的としては、話し手が、聞き手の理解を助けるべく、より適切な情報伝達を行うための言語行為であるという点で共通する。本稿では、日本語と韓国語の口頭発表における注釈挿入と言い直しに対し、修復を実現する際の言語的手段の選択という視点から対照を行う。それにより、日本語教育においては、従来の言語体系内の要素を単位とする対照も、学習者既存の母語能力を活用する有益な情報ではあるが、ある言語行為を行う際に、どのような言語的手段を選択するかという視点からの対照も有効、かつ必要であることを示す。3.1 では注釈挿入、3.2 では言い直しに焦点をあてて対照分析を行い、3.3 で注釈挿入と言い直しの結果をまとめる。

3.1 注釈挿入

発話を行う際に、発話の言語形式や言語行為について自ら補足的な注釈をくわえるという現象は、日常において頻繁に観察されるものである。船橋（2011）では、一文節を分断する形で補足的な注釈がくわえられているものを「注釈挿入」と呼び、日本語口頭発表における注釈挿入の発話構造とそれに伴う言語形式について述べている。発話に自ら補足的な注釈を行うという言語行為自体は、日本語、韓国語といった言語の別を問わず存在するものであろう。3.1.1 では、日本語の注釈挿入を確認し、3.1.2 では、韓国語の注釈挿入をみる。

3.1.1 日本語口頭発表における注釈挿入

船橋（2011）にもとづき、注釈挿入を確認する。注釈挿入とは、国立国語研究所・情報通信研究所機構・東京工業大学作成の『日本語話し言葉コーパス (The Corpus of Spontaneous Japanese)』(以

下、CSJとする)のコアに含まれる学会講演 70 講演から抽出された日本語母語話者の口頭発表に特徴的にみられる修復であり、聞き手の情報理解の負荷を軽減すべく、話し手が発話情報の構造化を行うことを指す。具体的には、(1)のように「日本語の受身文には二つのタイプがあります」という発話の文節途中で補足的な注釈「具体的な例文は資料に載せましたが」が挿入されるという現象である。

(1) 日本語の受身文、具体的な例文は資料に載せましたが、には二つのタイプがあります。

(船橋 2011: 106)

注釈挿入は、発話の本線を維持する行為(メイン・アクティビティー、以下、MAとする)から一時的にはずれ、サイド・アクティビティー(以下、SAとする)として補足的な説明を行うものである(林 2005: 7-13, 船橋 2011: 108-109)。(1)にも明らかのように、統語的には整わない構造でありながらもコミュニケーションに支障をきたすのではなく、MAとSAという情報の構造化を行うことにより、聞き手の情報理解の負荷を軽減し、効果的な伝達を行うと考えられる現象である。船橋(2011)では、MAからSAに移行する部分、SA部、SAからMAに復帰する部分における言語形式を整理している(表1)。

表1 注釈挿入における言語形式

位置	MAからSAに移行する部分	SA部	SAからMAに復帰する部分
言語形式	<ul style="list-style-type: none"> ・コ系指示詞 ・ソ系指示詞 ・挿入部前接要素の繰り返し ・フィラー (上記形式と併用のフィラー／単独フィラー) 	<ul style="list-style-type: none"> ・文末の形式 (です／ね／です) ・非文末の形式 (が／けれども ／けれども／けど) 	<ul style="list-style-type: none"> ・コ系指示詞 ・ソ系指示詞 ・非自立語 ・挿入部前接要素の繰り返し ・上記「非自立語」を除く形式と併用のフィラー

船橋(2011)を筆者が要約

3.1.2 韓国語口頭発表における注釈挿入

データは、韓国国内開催の学術大会(日本語関連の1大会、地理学関連の1大会¹の計2大会)において筆者が独自に収集した韓国語による口頭発表9発表(総時間数約2時間46分)の音声データ²とその文字起こしデータ(スクリプト)である。データの詳細は表2の通りである。韓国語母語話者2名³の協力のもと、注釈挿入の認定基準(船橋 2011: 111)にしたがい、注釈挿入を手作業で認定、収集した。

¹ 本稿では便宜上、学術大会の正式名称に代わり、それぞれ「日本語関連大会」、「地理学関連大会」と称する。

² 音声は、ビデオカメラ付属のワイヤレスマイクロフォンと発表者から約30センチに設置したICレコーダーを用いて採集した。

³ 日本国内の大学院博士後期課程に在籍し、日本語を専門とする韓国語母語話者2名である。収集の作業は筆者と個別に行った。

表2 韓国語口頭発表データの詳細

日本語関連大会			地理学関連大会		
話者	時間(分.秒)	日本語発表経験 ⁴	話者	時間(分.秒)	日本語発表経験
A	20.31	あり	E	18.27	あり
B	18.15	あり	F	14.47	なし
C	16.05	なし	G	11.37	なし
D	23.17	あり	H	25.57	なし
			I	17.08	なし

韓国語において、注釈挿入は観察されなかった。ただし、注釈挿入とは認定されないが、非常に近い発話構造の2例（以下の(2)と(3)）がみられた。(2)と(3)は、文節を分断しての挿入ではないため、注釈挿入とは認定できない例である。また(2)は、発話の本線に復帰する「일본국내(日本国内)」が、挿入部前接要素である「국내(国内)」とは完全に一致しない点も、注釈挿入の認定基準には合致しない例となる。しかし(2)と(3)は、文節を分断するか否かという構造的特徴は異なるものの、注釈挿入と言語行為上の質的な差はないと考えられる例である。

- (2) 그 다음에는 국내에서 일본국내 일본 국내에서 팀티칭한 거에 대해서 어떻게 생각하는지
(話者 A)

「その次には国内で、日本国内ですね、日本国内でチームティーチングしたことについてどう思うか」⁵

- (3) 음 실제대화에 나타난 여기 실제대화는 사회인 첫대면 대화 입니다만 실제대화에 나타난
とか의 담화상의 기능은 (話者 D)

「うん、實際對話に現れる、この實際對話は社会人初対面對話ですが、實際對話に現れる『とか』の談話上の機能は」

3.2 言い直し

3.1でみたように注釈挿入は、日本語においては散見されるのに対し、韓国語においては観察されなかった。韓国語において頻繁に観察された現象は、(4)と(5)のような「言い直し」あるいは「言い換え」と称される修復である。下線部にみられるように、(4)は、一度発話した内容を別の表現を使って修正しており、(5)は、誤った発音をしてしまい、直後に正しい発音に修正している例である。

- (4) 요 부분 제일 마지막에 있는 부분 아이부분이 双方向的意識化活動の評価 라고 해서
(話者 B)

「この部分、一番最後にある部分、i部分が双方向的意識化活動の評価とって」

⁴ 話者には、日本語あるいは韓国語を用いて「日本語による学術大会口頭発表経験の有無、および、日本語能力」についてインタビューを行った。そのインタビューにより得られた申告による。

⁵ SAに下線を施す。日本語訳を「」にくくって示す。日本語訳は、3.1.2にある韓国語母語話者2名による。以下、韓国語の用例は同様の方法で表記し、言い直しの場合は、言い直し関連部分に下線を施す。

- (5) 그러나 이 연담도시는 어 특히 전동적 전통적인 연담도시는 (話者 F)
 「しかし、この連接都市は、あの、特に、でんどうてき、伝統的な連接都市は」

(4) と (5) のような言い直し、あるいは、言い換えとされる現象は、日本語においても多く観察されるものである。既に丸山 (2008) が、日本語における言い直し、言い換えを「言い直し表現」と総称し、CSJ をデータとして言語構造と談話における機能から類型化を行っている。本稿では、「言い直し表現」を用いた言語行為を「言い直し」と称し、以下にみていくこととする。3.2.1 では、日本語と韓国語における言い直しの状況をみる。両言語の言い直しの状況を踏まえ、3.2.2 では、助詞の言い直しに焦点をしぼり分析する。

3.2.1 日本語と韓国語の口頭発表における言い直し

まず、丸山 (2008) にもとづき、日本語の言い直しを確認する。丸山 (2008: 122) は「発話中に現れたトラブル、およびそれを修復するために発話される表現」を「言い直し表現」と称し、その構造を (6) の図式でとらえる。

- (6) (被言い直し部 | 中断部 | 言い直し部)

「被言い直し部」は、発話中に現れたトラブルの部分であり、語断片や語、句、節などのさまざまな要素が現れる。「中断部」は、随意的に挿入される部分であり、フィラー、逡巡する表現 (例: 「そうですね」)、メタ的な編集表現 (例: 「と言うか」)、聞き手に対する配慮表現 (例: 「すみません」) など、言い直しのための編集表現が現れる。「言い直し部」は、被言い直し部を適切な形で修正したり言い換えたりする部分である。そして、CSJ の「コア」に含まれる 177 講演から言い直し表現を抽出し、その言い直し表現が談話内でどのような機能を果たしているかという観点から、表 3 に示す五つ (R1-R5) に分類している。

表 3 言い直しの 5 類型

類型	具体例 ⁶
R1: 発音誤りに伴う言い直し	(7) コンテキスト ((D いぞ) 依存) モデルを使う
R2: 単純な繰り返し	(8) その下の (F おー) (波線 波線) を付けました
R3: 語の選択誤りに伴う言い直し	(9) 同音異義を (分別 (F えー) 弁別) しているという (10) 短調独特の (旋律の (F え) 旋律を) 形作っている (11) クロマというのは音名 ((D2 の) (F え)) に相当するものです (12) 明瞭には (見え 見られ) ないということです
R4: 情報不足に伴う言い直し	(13) 入ってきた 途端に (ショーケース ドーナツのショーケース) を見て
R5: 別表現への言い換え	(14) (起床は (F あの一) 朝 起きるのは) 二時から 三時ぐらいで

丸山 (2008: 126-130) をもとに筆者が作成

⁶ 「(F)」で囲まれた要素はフィラー、「(D)」は語断片、「(D2)」は言い直された助詞に相当し、すべて CSJ の転記テキストによるものである。

つぎに、韓国語の言い直しである。韓国語の言い直しでは、3.1.2の音声データとスクリプトを用い、韓国語母語話者2名⁷の協力のもと言い直しを手作業で収集し、表3の5類型にしたがって整理した。韓国語における言い直しの出現状況を、話者別、大会別に示したものが表4である。

日本語の言い直しにみられる言語的手段(表3)と、韓国語の言い直しにみられる言語的手段(表4)に関して、日韓両言語で同様のパターンが複数例観察された。韓国語においては各話者の発話量(データ時間数)が異なるので、出現数に関する話者間の比較、日本語に関連する大会か否か等による比較はできないが、大会区分、話者を問わず、5類型のほぼすべてにわたる言い直しがなされていることがわかる。日韓両言語間において、5類型のパターン上、特記すべき差異、特徴は窺われず、両言語における言い直しの言語的手段は概ね近似していると考えられる。しかし、言い直しの類型R3に分類される助詞の言い直しを言い直す行為(以下、「助詞の言い直し」とする)においては異なりが窺われた。日本語の助詞の言い直しには、二つの言語的手段、つまり、助詞に前接する名詞から言い直す手段(表3(10)参照、以下、この言語的手段を「名詞から」とする)と、助詞のみを言い直す手段(表3(11)参照、以下、この言語的手段を「助詞のみ」とする)が可能であることが指摘されている(林2005, 丸山2008)。この二つの言語的手段に関して、韓国語においては、「名詞から」は16例が観察されたものの、「助詞のみ」は1例が観察されたのみであった。表4の()でくくった数字が「名詞から」の出現数、[]でくくった数字が「助詞のみ」の出現数である。

表4 韓国語における言い直しの出現状況

類型	日本語関連大会の話者別出現状況					地理学関連大会の話者別出現状況						合計
	A	B	C	D	小計	E	F	G	H	I	小計	
R1	10	6	1	4	21	11	7	0	3	5	26	47
R2	12	2	2	3	19	1	2	2	4	0	9	28
R3	12 (3)	11 (1)	5	25 (6)	53 (10)	18 (1)	11 (4)	2 (1)	14 [1]	9	54 (6)[1]	107 (16)[1]
R4	3	1	0	6	10	4	5	1	6	2	18	28
R5	3	10	1	15	29	1	1	0	3	4	9	38

以下では、両言語において異なりがみられた助詞の言い直しに焦点をしぼり、その詳細をみていくことにする。

3.2.2 日本語と韓国語の口頭発表における助詞の言い直し

本稿における助詞の言い直し⁸とは、名詞に助詞を付属させて産出したのちに、同じ名詞に別

⁷ 3.1.2にある韓国語母語話者2名である。

⁸ 「助詞のみ」では、名詞の再産出はなく省略されるわけだが、省略できるということから、同じ名詞が想定され言い直されていると考えられる。また、助詞に関連する言い直しでも、同じ助詞を繰り返す例、助詞を助詞以外の要素に言い直す例、あるいは、助詞以外の要素を助詞に言い直す例、助詞の脱落を補っている、あるいは、余剰な助詞を脱落させる例は、本稿の助詞の言い直しには該当しない。

の助詞を付属させて言い直す修復である。日本語に関しては既に、林（2005）や丸山（2008）が助詞の言い直しにおける二つの言語的手段の存在を指摘している。特に林（2005）においては、他の言語も視野に入れ、次のような疑問が示されている。

名詞の格を形態的に表示する言語の中でも、格表示を接尾辞で行う言語（トルコ語、ロシア語、フィンランド語他多数）での日常会話において、いったん名詞がある格形式で産出した後、それを別の格の名詞として再規定する場合に、名詞の語幹を反復することなく、新たな格を表す接尾辞だけを発話して先行名詞の再規定を行なうことは可能だろうか。日本語と同様に後置詞を用いる言語（韓国語など）ではどうだろうか。（林 2005: 17, 下線は筆者）

この疑問においては、下線を施した言語的手段、すなわち「助詞のみ」に対して、「韓国語ではほとんど見られない」との個人談話が注として付記されている（林 2005: 24）ものの、丸山（2008）も含め、二つの言語的手段の詳細は明らかにされていない。よって以下では、日韓の助詞の言い直しにおける、二つの言語的手段の詳細を把握する。

まず、日本語からみていく。言い直しの類型化を行っている丸山（2008）では、CSJのコアに含まれる学会講演 70 講演と模擬講演 107 講演を分析データとしているが、本稿は、韓国語データとデータの性質を揃えるために、実際の学術的口頭発表データである学会講演 70 講演のみを分析対象とし、CSJの転記テキストと音声データをもとに助詞の言い直しを抽出した。転記テキストのみならず、音声データを分析データとした理由は二つある。一つは、CSJと本稿が独自に収集した韓国語データでは、データの収集環境、使用機材といった点において全く同一の手順を踏むことができないものの、可能な限りデータの質を揃えるという必要性からである。もう一つは、助詞の言い直し構造は、音声上の特徴によっても示されるものであるとの考えから、音声特徴も把握すべきであるという必要性による。日本語の助詞の言い直しを抽出する際には、以下の表5に示した例は認定から除外した。表5の(15)、(16)は、日本語と韓国語のデータの質を揃えるという必要性から、また、表5の(17) - (20)は、自発的な発話において、「名詞から」「助詞のみ」という言語的手段のどちらが選択されるかという本稿の分析要点にもとづき除外した例である。一方、韓国語では、表5の(15)、(16)を除く認定基準により、助詞の言い直しを抽出した⁹。

⁹ 韓国語で表5にあたる除外例はない。なお、「저는(私は)」を「제가(私が)」に言い直す「名詞から」が1例あったが、これは、「저」「제」が完全に同じ前接名詞ではないこと、また、前接名詞の言語形式の変化は格変化に伴うものであり、言語的手段が「名詞から」に限定される例であることから除外した。

表5 日本語における助詞の言い直しの除外例

除外例		除外数 ¹⁰
転記テキストでは助詞の言い直しがみとめられるが、	(15) 音声データでは助詞の言い直しが聴取できない例 ¹¹	1/2
	(16) 該当部分の音声データが存在しない例	0/2
(17) 言い直し部において、助詞の前接名詞を修飾する新出要素が付加されている例		7/0
(18) 中断部が発話の本線とは異なるひとまとまりの発話になっている例		3/0
(19) 転記テキストでは助詞の言い直しがみとめられる ((D2) タグが付されている) が、文意が不明なため助詞の言い直し構造が確定できない例		0/4
(20) 資料等の読み上げにおいて助詞の言い直しがみとめられた例		1/3

日韓における助詞の言い直しの出現状況¹²を言語的手段からまとめたものが表6である。日本語では、「名詞から」が約3割であるのに対し、「助詞のみ」が約7割と、「名詞から」の2倍以上の出現数となっている。これに対し韓国語では、「名詞から」が9割を超え、「助詞のみ」は1例と1割に満たない出現状況である。

表6 助詞の言い直しの出現状況

	日本語	韓国語
名詞から	61 (29.3%)	16 (94.1%)
助詞のみ	147 (70.7%)	1 (5.9%)
合計	208 (100.0%)	17 (100.0%)

3.3 注釈挿入と言い直しの総合的結果

まず、注釈挿入に関して、韓国語においては、注釈挿入に近い形（文節を分断しての挿入ではない挿入構造）が2例みられたものの、注釈挿入はみられなかった¹³。注釈挿入は、CSJにおいては、70講演（総時間数約21時間24分）中の約半数（34講演）に64例というように、日本語においては散見される現象である（船橋2011）。この点からすると、本稿の限られたデータではあるが、韓国語における結果は日本語に比して「少ない」といえよう。3.1.1の表1にある注釈挿入を構成する要素（言語形式）は、韓国語にも対応する要素が存在する。ここから、口頭発表において

¹⁰ 除外数は、「名詞から」の数／「助詞のみ」の数で示す。

¹¹ 「聴取できる、できない」という認定は、筆者を含む3名の日本語母語話者の聴取が一致した場合を採用した。

¹² なお、話者からみた出現状況は、日本語（全70話者）では、二つの言語的手段がみられたのが32（45.7%）、「助詞のみ」が20（28.6%）、「名詞から」が6（8.6%）、助詞の言い直しがみられないのが12（17.1%）である。韓国語（全9話者）では順に、0（0.0%）、1（11.1%）、6（66.7%）、2（22.2%）であった。

¹³ 日本語による学術大会口頭発表の経験がある話者A, B, D, Eにおいても注釈挿入がみられなかった点から、注釈挿入に関しては日本語による影響を排除して分析が可能であると思われるが、話者Aは日本国内の大学において博士の学位を取得した話者であり、くわえて、話者Aからは、学術大会口頭発表は日本語を用いてしか行った経験がなく、韓国語による発表がはじめてであるとの申告を得ている。また、話者Dも日本国内の大学において博士の学位を取得した話者である。推測の域をでないが、注釈挿入に近い発話構造である話者Aの(2)、話者Dの(3)に日本語の影響が全くないとは言い切れない点を付記したい。

進行中の発話に自ら補足的な注釈をくわえたいという、言語をこえて同様に存在すると考えられる言語行為を行う際、日韓では対応する要素が存在するにもかかわらず、選択される言語的手段が異なることが示唆されよう。

つぎに、助詞の言い直しでは、日韓において助詞を言い直すという言語行為は同じく存在するものの、その言語的手段には違いがみとめられた。日本語では、二つの言語的手段がともに観察され、「助詞のみ」が「名詞から」の2倍以上と、より多く用いられる。韓国語では、「名詞から」が16例と多く観察され、「助詞のみ」は1例であった。

4. 考察

3.3 でみた、日韓における異なりの背景には何があるのだろうか。注釈挿入に関しては、それ自体が本稿の韓国語データにおいて観察されなかったため、まず、日韓両言語で観察された助詞の言い直しを詳細にみたい。

日本語における助詞の言い直しでは、たとえば、「を」を「が」に言い直す場合は、「助詞のみ」が選択される」といった、特定の助詞と二つの言語的手段との間に相関関係はみとめられなかった。ただし、中断部(3.2.1(6)参照)に現れる言語形式と二つの言語的手段との間には関連性が窺われた。中断部の言語形式から二つの言語的手段の出現をみたものが表7である。中断部には何も差し挟まず直ちに言い直し部が発話される場合、8割以上は「助詞のみ」が選択され、中断部に語断片やフィラーが生じる場合は、3分の2弱が「助詞のみ」、3分の1強が「名詞から」が選択される。中断部に実質語が差し挟まれる場合には、「名詞から」が9割と優勢になり、「助詞のみ」は1割と少ない。表6でみたように、日本語の場合、助詞の言い直しにおける言語的手段は「助詞のみ」が優勢であったが、それは、線状的に進行する発話のどの段階で修復を開始するかという、修復の開始位置と関連性があることが窺われる。一方の韓国語では、表8に示すように、修復の開始位置等にかかわらず、「名詞から」がほぼ義務的に選択されていることがわかる。

表7 中断部の言語形式からみた言語的手段の出現状況(日本語)

言語形式	なし		語断片, フィラー ¹⁴		実質語 ¹⁵	
	名詞から	助詞のみ	名詞から	助詞のみ	名詞から	助詞のみ
出現数	16 (13.9%)	99 (86.1%)	26 (36.1%)	46 (63.9%)	19 (90.5%)	2 (9.5%)
小計	115 (100.0%)		72 (100.0%)		21 (100.0%)	
合計	208					

¹⁴ 語断片かフィラー、あるいは、両方が生起する例がある。なお、表8の「語断片, フィラー」にある2例は、語断片1例とフィラー1例である。

¹⁵ 語断片, フィラーを伴って生起する例を含む。

表 8 中断部の言語形式からみた言語的手段の出現状況 (韓国語)

言語形式	なし		語断片, フィラー		実質語	
	名詞から	助詞のみ	名詞から	助詞のみ	名詞から	助詞のみ
出現数	11 (91.7%)	1 (8.3%)	2 (100.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)	0 (0.0%)
小計	12 (100.0%)		2 (100.0%)		3 (100.0%)	
合計	17					

林 (2005: 17) は、先に引用した疑問につづけて、「ここで問題になるのは、それぞれの言語において、格表示の標識が名詞の語幹にどの程度膠着・融合しているかということであると思われる」と述べており、これは、本稿のデータを考察する上で重要な指摘であると考えられる。つまり、実際の発話データにおいてみとめられた日韓の異なりの根底には、助詞と名詞の膠着度の違いという、類型的特性の異なりがあると推測する。

日韓両言語はともに、名詞に助詞を後置する膠着型言語であるが、従来、日本語の助詞と名詞の間の膠着度は韓国語に比して低いことが指摘されている (柴谷 1984, 堀江 2001 など)。つまり、日本語の助詞は韓国語のそれよりも自立性が高いということである。柴谷 (1984) は、日本語の「本を」は hon・o であって、決して ho・no とはならないのに対し、韓国語の「本」は chaek と一音節であるが、これに主格の i が付けば、chae・ki と、二音節に分析されることを例にあげ、韓国語の格を表す要素は日本語の助詞に比べて名詞との膠着度が高いことを指摘している。堀江 (2001) も日本語と韓国語の膠着度の異なりに触れ、日本語は、話し言葉において属格の「の」が「ん」になるような現象 (例: 「僕のうち」が「僕んち」になる現象) を除いては形態が一定不変だが、韓国語は、直前に生起する名詞が子音で終わるか母音で終わるかによって、表 9 のように、異形態が存在する格助詞があることを述べている。なお、格助詞のほか、係助詞「は」にも異形態「nun/un (는/은)」が存在する。

表 9 日韓の格助詞の対照

	日本語	韓国語
主格	が	ka/i (가/이)
対格	を	lul/ul (를/을)
向格	に, へ	lo/ulo (로/으로)
具格	で	lo/ulo (로/으로)
共格	と	wa/kwa (와/과)

堀江 (2001: 195) より異形態が存在する助詞を抜粋、ハングル表記は筆者

さらに、本稿の分析からは、助詞と名詞の膠着度が (少なくとも、韓国語に比して) 低い日本語では、線状的に進行する発話のどの段階で助詞の言い直しを開始するかという、修復の開始位置が言語的手段の選択要因の一つになっていると考えられる。日本語においては、助詞と名詞の膠着は助詞の言い直しの言語的手段における直接的な選択要因ではない。文脈の要請としてある発話内容の明確性がかかわっており、それにしたがって、話者は二つの言語的手段から一つを選

択することになる。一方の韓国語では、文脈はかかわらない。助詞と名詞の高い膠着度により、言語的手段が「名詞から」にほぼ限定されていると考えられる。

韓国語においては「名詞から」にほぼ限定されるわけだが、本稿のデータからは「助詞のみ」が不可能というわけではないこともわかった。本稿のデータにおいては、「助詞のみ」が1例（以下の(21)）観察された。(21)は、音声上、被言い直し部の助詞が若干延伸している聴覚印象があるものの、中断部で無声区間（約300ms）を生じたのちに言い直し部の助詞が発話される例であった。中断部に無声区間を生じさせ音声的に断ち切るという言語的手段は、内省としては、言い直し構造を際立たせるものである。日本語では(21)と同じように、中断部に何も差し挟まずに即言い直しがなされる99例のうち、中断部に200ms以上の無声区間を生じる例が52例あった。それを考えると、「助詞のみ」で即言い直しをする場合は、中断部に無声区間を生じさせることが、必須ではないにしても、言い直し構造を明確化する言語的手段の一つとしてあると考えて問題はなさそうである。ここから韓国語の(21)も、その音声特徴は言い直し構造を際立たせ、明確に助詞のみを言い直している例であると解釈可能であろう。推測の域をでないが、この1例は言い直し部の助詞(의)が前接名詞にかかわらず不変であり、異形態が存在しないという点が、考え得る選択要因としてあげられようか。(21)の選択要因、異形態の有無と助詞の言い直しの詳細は、本稿のデータではこれ以上論じることができない¹⁶。今後の課題としたい。

- (21) 도시의 그 일반인들을 의 삶을 주제로 다루기 시작한 거는 (話者 H)
「都市の、その、一般人たちを、の人生を主題として扱いはじめたのは」

なお、日本語の助詞は、日常会話において(22)の下線部のように、非自立語である助詞から発話を再開するという言語的手段があることが指摘されている(林2005)。また、(23)の二重下線部のように、注釈挿入におけるMA復帰の言語的手段として用いられることも指摘されている(船橋2011など)。これらは、本稿でみた「助詞のみ」と同様に、日本語の助詞の自立性の程度(膠着度の程度)が可能にしている言語的手段であると考えられる。注釈挿入に関しては、それ自体が本稿の韓国語データにおいて観察されなかったが、日本語の話し言葉における助詞の(22)、(23)にみられるような言語的手段は、韓国語においては用いられにくいことが、本稿の分析結果からも十分に推測されよう。

- (22) 01 M: そやから: あのう: もし
02 六時半やったやんな:
03 H: うん。
04 M: に: たどりついてなかったら, (林2005: 9, 表記は筆者が簡略化した)

¹⁶ 本稿で観察された韓国語の助詞の言い直し(全17例)においては、言い直し部の助詞に異形態が存在するもの9例、存在しないもの8例である。これだけのデータでは、助詞の言い直しにおける言語的手段と異形態の有無の関連性を論じることができない。

- (23) ある概念が (F あー) 支配する概念数 (F ま) 子孫となる概念数ですねが一定値になるように (A03M0005)¹⁷

最後に、注釈挿入に関して付記したい。注釈挿入は、韓国語データでは観察されず、文節途中における挿入に限定しない挿入構造¹⁸まで認定基準を緩めても、2例が観察されたのみであった。なお、観察されたこの2例はともに、日本語による学術的な口頭発表のトレーニングを受けている韓国語母語話者の例であったことも留意すべきであると考ええる。注釈挿入を含め、挿入構造をめぐる日本語と韓国語の異なりは、膠着度の異なりだけでは説明がつかないわけだが、本稿にはこの点を論じる準備がない¹⁹。異なりの要因を特定することはできないが、「異なる」という言語的手段の状況を把握できたことにより、韓国語を母語とする学習者に対しては、注釈挿入、あるいは、挿入構造が日本語の口頭発表においては用いられること、線状的に進む発話の流れを妨げない形で、補足的な説明を行う言語的手段として有効であることを積極的に示していくことが考えられよう。韓国語を母語とする学習者の中には、日本語を用いて学術的な口頭発表を行う機会がある学習者が多く見受けられることから、この異なりの示唆するところは小さくないと考える。

5. おわりに

話すコミュニケーションにおいて「聞き手にわかりやすく話す」という配慮は、日本語、韓国語といった言語の如何を問わず、共通の営みとして存在するものであろう。聞き手の理解を助けるべく、適切な情報伝達を目指す言語行為は、言語をこえて同様にみられるものである。本稿では、同じ言語行為を行う際、日韓において対応する言語体系内の要素が存在するにもかかわらず、選択される言語的手段の異なりがみとめられた。くわえて、日韓に散見された助詞の言い直しにおいては、選択される言語的手段が、助詞と名詞の膠着度の異なりという類型的構造の異なりとかかわっていること、その膠着の程度を基底として、日本語の場合は、文脈の要請としてある発話内容の明確性が直接的な選択要因の一つであることが示唆された。

日韓の高い類似性により、韓国語母語話者にとって日本語は、言語的直観が広範囲にわたって応用できる、学びやすい言語であると認識されることも多い(許 2010 など)。しかし、本稿でみた日本語における注釈挿入、助詞の振る舞いは、韓国語母語話者にとっては想定しにくい言語的手段であると考えられる。日本語教育のための対照研究を考えた場合、形態素、文法カテゴリー、文型単位といった言語体系内の要素から立ち上がる対照により得られる情報も有益ではあるが、

¹⁷ SA に下線を施した。「(F)」で囲まれた要素はフィラーであり、CSJ の転記テキストによるものである。末尾の括弧内英数字は CSJ のデータ番号である。

¹⁸ 挿入構造に関しては、丸山他 (2004)、高梨・丸山 (2007) において、CSJ をデータとした議論が行われている。文節途中における挿入 (注釈挿入) は挿入構造に含まれる現象である。

¹⁹ 推測される要因の一つとして、言語使用域 (register) の問題があげられる。日本語による学術大会における口頭発表と韓国語のそれとでは、求められるあらたまり度が異なる可能性も考えられ、発話の言語形式や言語行為について自ら補足的な注釈をくわえたいとなったとき、発話途中での挿入を行うか否かに影響していることが推測される。この推測を検証するには、日常的な発話 (いわゆる雑談) データの分析を行うなど、新たな調査が必要となる。

言語体系内の要素から出発したのでは、本稿でみたような言語間の異なりはみえてこない。学習者の母語を考慮した日本語情報、それを支える日本語教育のための対照研究には、本稿で試みた、ある言語行為を行う際の言語的手段の選択というアプローチも必要であると考え。

参考文献

- コムリー, バーナード (著), 松本克己・山本秀樹 (訳) (1992) 『言語普遍性と言語類型論』東京: ひつじ書房。
[Comrie, Bernard (1989) *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*. 2nd edition. Oxford: Basil Blackwell.]
- 船橋瑞貴 (2011) 「注釈挿入の発話構造と言語形式一言語による発話構造の有標化」『日本語文法』11(1): 105-121.
- 林誠 (2005) 「『文』内におけるインターアクション—日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『シリーズ文と発話 1 活動としての文と発話』1-26. 東京: ひつじ書房.
- 堀江薫 (2001) 「膠着語における文法化の特徴に関する認知言語学的考察—日本語と韓国語を対象に」山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎 (編) 『認知言語学論考 1』185-227. 東京: ひつじ書房.
- 許明子 (2010) 「日韓対照研究と日本語教育—話し手と聞き手との関係から見た日本語と韓国語の言語行動について」砂川有里子・加納千恵子・一二三朋子・小野正樹 (編) 『日本語教育研究への招待』273-288. 東京: くろしお出版.
- 井上優 (2002) 「『言語の対照研究』の役割と意義」国立国語研究所 (編), 3-20.
- 国立国語研究所 (編) (2002) 『日本語と外国語との対照研究 X 対照研究と日本語教育』東京: くろしお出版.
- 熊谷智子 (2002) 「『対照研究』と『言語教育』をつなぐために」国立国語研究所 (編), 21-33.
- 丸山岳彦 (2008) 「『日本語話し言葉コーパス』に基づく言い直し表現の機能的分析」『日本語文法』8(2): 121-139.
- 丸山岳彦・高梨克也・内元清貴 (2004) 「『日本語話し言葉コーパス』に現れた挿入構造の分析」『言語処理学会第10回年次大会発表論文集』448-451.
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』東京: 大修館書店.
- 生越直樹 (2002) 「序 対照言語学の展望」生越直樹 (編) 『対照言語学』1-7. 東京: 東京大学出版会.
- 柴谷方良 (1984) 「膠着語とは何か」『研究資料日本文法 5 助辞編 (1)』34-52. 東京: 明治書院.
- 鈴木孝明・白畑知彦 (2012) 『ことばの習得—母語習得と第二言語習得—』東京: くろしお出版.
- 高梨克也・丸山岳彦 (2007) 「自発的な話し言葉に見られる挿入構造と線状化問題」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『シリーズ文と発話 3 時間の中の文と発話』67-102. 東京: ひつじ書房.

関連 Web サイト

日本語話し言葉コーパス (国立国語研究所) http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/

Japanese-Korean Contrastive Analysis Based on Repair Strategies in Oral Presentation: In Light of Japanese Language Education

FUNAHASHI Mizuki

Gunma University / Project Collaborator, NINJAL [-2014.09]

Abstract

This paper examines the language in repair (annotation insertion and self-repair) in Japanese and Korean oral presentations and confirms different verbal measures used to realize these repairs. The self-repair of particles, which is one of the representative self-repairs, implies the possibility that the selected verbal measures are associated with differences in the agglutination degree of the particles and nouns. Further, it is shown that in Japanese, in which the agglutination degree of the particles and nouns is low, these are connected with the start position of the self-repair. In most approaches used in conventional contrastive analysis, the elements in the language system are assumed as units for comparison; however, I believe that approaches involving the selection of verbal measures for specific language actions are also needed in contrastive analysis for Japanese language education.

Key words: selection of verbal measure, agglutination degree of particles and nouns, annotation insertion, self-repair